

英国の封建制と鹿猟林：原始的蓄積論のために

福留，久大

<https://doi.org/10.15017/4494360>

出版情報：経済学研究. 60 (5/6), pp.169-180, 1995-02-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



〔資料〕

英国の封建制と鹿猟林

——原始的蓄積論のために——

福 留 久 大

(1) 紹介資料の周辺の事情

——スコットランド鹿猟林

『資本論』第1巻第24章「いわゆる原始的蓄積」第2節「農村住民からの土地の収奪」を、マルクスは次のように締め括っている。「教会領の横領、国有地の詐欺的な譲渡、共同地の盗奪、横領と容赦ない暴行とによって行なわれた封建的所有や氏族的所有の近代的私有への転化、これらはみなそれぞれ原始的蓄積の牧歌的な方法だった。それらは、資本主義的農業のための領域を占領し、土地を資本に合体させ、都市工業のためにそれが必要とする無保護なプロレタリアートの供給をつくりだしたのである。」(Karl Marx, *Das Kapital*, Bd. 1 [*Marx-Engels-Werke*, Bd. 23, 1962] S. 760-1.『資本論』第1巻, 岡崎次郎訳, 国民文庫版, 第3分冊, 391-2頁。ただし、訳文は変更した部分もある。以下『資本論』からの引用は、K1. S. 760-1 ; ③391-2頁のように略記する。)

ここに記されている「氏族的所有の近代的私有への転化」に、マルクスは特別の関心を抱きつづけた。「スコットランド高地のケルト人は氏族から成っていて、氏族はそれぞれ自分の定住している土地の所有者だった。氏族の代表者、その首長または“グレート・マン”はただこの土地の名目上の所有者でしかなかったという事は、ちょうど英国の女王が全国土の名目上の所有者であるようなものである。(中略)彼らは、自分自身の権威によって彼らの名目的所有権を私有権に変えた。そして、氏族員たちの反抗にぶつかったので、彼らは公然の暴力で氏族員たちを追い払おうと決心した。」(K1. S. 756-7 ; ③383頁)

この氏族員たちの暴力による追放を、マルクスは「地所の清掃」と名づけて、その具体的描写を幾つも引用している。「農耕民から土地を取り上げる最後の大がかりな収奪過程は、いわゆる地所の清掃 (Cleaning of Estates —— 実際には土地からの人間の掃き捨て) で

ある。これまで考察してきた一切の英国的方法是、この『清掃』において、頂点に達した。(中略)しかし、本来の意味での『地所の清掃』が何を意味するかは、近代ロマン文学の約束の地、スコットランド高地で、はじめて知ることができる。そこでは、この過程が、その組織的な性質によって、またそれが一挙に遂行される規模の大きさによって (アイルランドでは地主たちはいくつかの村を同時に清掃することに成功したが、スコットランド高地ではドイツの公国ほどの大きさの地面が清掃される) ——そして最後に、横領された土地所有の特殊な形態によって、一段ときわだっているのである。」(K1. S. 756, ③382-3頁)

「横領された土地所有の特殊な形態」としてマルクスが着目しているのが、一つには、村落の牧羊場への転化であり、二つには、牧羊場の狩猟場への再転化である。スコットランドにおける牧羊場への転化、その狩猟場への再転化は、19世紀において生じた出来事であり、その登場人物はマルクスの同時代人でもあった。そして、マルクスの実生活に何らかの波紋をもたらしもした。

このような同時代性が、スコットランドの「地所の清掃」にみられる上述の「組織的な性質」「規模の大きさ」「特殊な形態」という特色に付加されて、マルクスの関心を惹きつけたのだらうと考えられる。『資本論』第1巻初版においても、この部分には、ジェームズ・ステュアート『経済学原理の研究』(James Steuart ; *An Inquiry into the Principles of Political Economy*)、ピーチャ・ストー『アンクル・トムズ・ケビン』(Harriet Elizabeth Beecher Stowe ; *Uncle Tom's Cabin, or Life among the Lowly*) など十指に余る著書・論説の引用や言及が含まれており、それを通じて叙述の具体性を高める工夫が図られている。初版刊行後5年、1872年の再版のこの部分には、さらに「第二版への追補」として、二つの論説から引用が付加されている。一つは、「1866年3月、レオン・リーヴアイ教授は、牧羊場の猘林化について技芸協会で一場の講演

をした」(K1. S. 760, ③390頁) というその講演 (On Deer Forests And Highland Agriculture In Relation To The Supply Of Food. By Professor Leone Levi. Journal Of The Society Of Arts, March 23, 1866)。二つが, 「1866年 6 月 2 日のロンドン『エコノミスト』(Der Londoner "Economist" vom 2. Juni 1866)」(K1. S. 760, ③391頁) である。ここで紹介するのが, この号に掲載された「農業: 封建制と鹿猟林 (Agriculture — Feudalism And Deer Forests)」である。

(2) 紹介資料の引用の部分

——鹿猟林の規模と悪影響

マルクスが『エコノミスト』から引用した論説の全文は, 後掲のように, 1 行10語前後で, 224行から構成されている。「農業 (Agriculture)」「封建制と鹿猟林 (Feudalism and Deer Forest)」という表題で, 筆者の署名はない。そのなかから, マルクスは, 最初の15行ぐらい, スコットランドの一新聞の記事の紹介部分と, 158行から17行ぐらい, スコットランドのパーズのギルドホールで行なわれたロバートソン氏の講演「狩猟法と鹿猟林 (Game Laws and Deer Forest)」からの引用部分と, この二つの部分を抜粋, 引用している。

以下, マルクスによる引用の部分を, 独文, 日文, 対応する英語原文の順番に記しておく。

〈マルクスの引用の独文〉

Der Londoner „Economist“ vom 2. Juni 1866 sagt: „Ein schottisches Blatt berichtet letzte Woche unter andren Neuigkeiten: „Eine der besten Schafpachten in Sutherlandshire, wofür jüngst, beim Verfall des laufenden Pachtkontrakts, eine Jahresrente von 1200 Pfd. St. geboten ward, wird in einen deer forest verwandelt!“ Die feudalen Instinkte betätigen sich...wie zur Zeit, wo der normännische Erobrer...36 Dorfschaften zerstörte, um den New Forest zu schaffen...Zwei Millionen Acres, welche einige der fruchtbarsten Ländereien Schottlands einbegreifen, sind ganz und gar wüst gelegt. Das natürliche Gras von Glen Tilt zählte zu den nahrhaftesten der Grafschaft Perth; der deer forest von Ben Aulder war der beste Grasgrund im weiten Distrikt von Badenoch; ein Teil des Black Mount forest war das vorzüglichste schottische Weideland für schwarzgesichtige Schafe. Von der Ausdehnung

des für Jagdliebberei wüstgelegten Grund und Bodens mag sich eine Vorstellung bilden aus der Tatsache, daß er einen viel größeren Flächenraum umfaßt als die ganze Grafschaft Perth. Den Verlust des Landes an Produktionsquellen infolge dieser gewaltsamen Verödung mag man daraus schätzen, daß der Boden des forest von Ben Aulder 15000 Schafe nähren konnte und daß er nur 1/30 des gesamten Jagdreviers von Schottland beträgt...All dies Jagdland ist durchaus unproduktiv...es hätte ebensowohl in die Fluten der Nordsee versenkt werden können. Solchen improvisierten Einöden oder Wüsten sollte die starke Hand der Gesetzgebung den Garaus machen.“ (S. 761-2)

〈日本語に翻訳してみる〉

1866年 6 月 2 日のロンドン『エコノミスト』は次のように言っている。「先週スコットランドの某紙はほかのニュースと一緒に次のように報道している。『サザランドシャの最良の牧羊場の一つで, 近ごろ, 現在の賃貸契約が満期になったら年地代1200ポンドで契約しようという申し込みを受けたものがあったが, それが鹿猟林にされてしまうのだ!』と。ノルマンの征服王が……新しい森をつくるために……36の村を破壊した当時と同じように……封建的本能が, 活動しているのである。……スコットランドの最も豊かな土地のいくつかを含めて200万エーカーが全く荒れるにまかされている。グレン・ティルトの野草は, パース州の最も養分の多い草の一つに数えられていた。ベン・オルダの鹿猟林は, ベードノックの広い地域のなかでも最良の草地だった。ブラック・マウントの森の一部は, 黒緬羊のためにはスコットランドで最も優秀な牧場だった。狩猟道楽のために荒れるにまかされている土地がどんなに広大なものであるかは, それがパース州全体よりもずっと広い面積を占めているという事実からも想像されるであろう。このようなひどい荒らされ方によって生産源としての土地が受ける損失は, ベン・オルダの森林の土地は15,000頭の羊を飼養できたということ, しかもそれはスコットランドの全狩猟場のわずかに30分の1にしか及ばないということからも, 見積もることができるであろう。……すべてこのような狩猟地は, 全く不生産的であり, ……北海の波の底に沈められたも同じことである。このような即席につくりだされる荒れ地の出現には, 立法の強い手がとどめを刺すべきであろう。」(③391頁)

〈対応する英語の原文〉

Amongst the items of news in a Scotch newspapers of last week we read the following announcement,—"One of the finest sheep farms in Sutherlandshire, for which a rent of 1,200*l* a year was recently offered, on the expiry of the existing lease this year, is to be converted into a deer forest." Yet here we see the modern instincts of feudalism ... operating pretty much as they did when the Norman Conqueror ... destroyed 36 villages to create the New Forest.... Two millions of acres had been laid totally waste, embracing within their area some of the most fertile lands of Scotland. The natural grass of Glen Tilt were among the most nutritive in the county of Perth. The deer forest of Ben Aulder was by far the best grazing ground in the wide district of Badenoch ; a part of the Black Mount forest was the best pasture for blackfaced sheep in Scotland. Some idea may be formed of the ground laid waste for purely sporting purpose in Scotland from the fact that it embraced an area larger than the whole county of Perth. The resources of the forest of Ben Aulder might give some idea of the loss sustained by the country from these forced desolations. The ground would pasture 15,000 sheep, and as it was not more than one-thirtieth part of the old forest ground in Scotland, All that forest land was totally unproductive, ... *It might thus as well have been submerged under the waters of the German Ocean....* such extemporised wildernesses or deserts ought to be put down by the decided interference of the Legislature.

〈エンゲルス編集の英訳〉

因みに、エンゲルス編集の1895年の『資本論』第1巻の英語版で、当該箇所がどうなっているかをみると、以下の通りである。マルクスの独文を直接に英訳するのでなく、『エコノミスト』原文に基づいて作成されていることが、容易に判明するであろう。

The London *Economist* of June 2, 1866, says, "Amongst the items of news in a Scotch paper of last week, we read.... 'One of the finest sheep farms in Sutherlandshire, for which a rent of £1,200 a year was recently offered, on the expiry of the existing lease this year, is to be converted into a

deer-forest.' Here we see the modern instincts of feudalism ... operating pretty much as they did when the Norman Conqueror ... destroyed 36 villages to create the New Forest.... Two millions of acres ... totally laid waste, embracing within their area some of the most fertile lands of Scotland. The natural grass of Glen Tilt was among the most nutritive in the country of Perth. The deer-forest of Ben Aulder was by far the best grazing ground in the wide district of Badenoch ; a part of the Black Mount forest was the best pasture for black-faced sheep in Scotland. Some idea of the ground laid waste for purely sporting purposes in Scotland may be formed from the fact that it embraced an area larger than the whole country of Perth. The resources of the forest of Ben Aulder might give some idea of the loss sustained from the forced desolations. The ground would pasture 15,000 sheep, and as it was not more than one-thirtieth part of the old forest ground in Scotland ... it might, &c.... All that forest land is as totally unproductive.... It might thus as well have been submerged under the waters of the German Ocean.... Such extemporised wildernesses or deserts ought to be put down by the decided interference of the Legislature." (p. 685)

マルクスの引用した部分では、専ら鹿猟林が問題とされ、その規模の大きさとそれゆえの土地資源の無駄使いとが指摘され、法律による鹿猟林の禁圧が主張されている。上述のように、マルクスが引用した「エコノミスト」の論説の表題は「封建制と鹿猟林」となっているのであるが、マルクスはこの表題そのものの引用を避けたうえで、内容的にも表題後半の「鹿猟林」への言及がほとんどを占めている。表題前半の「封建制」への関説は、わずかに次の一節だけである。「ノルマンの征服王が……新しい森をつくるために……36の村を破壊した当時と同じように……封建的本能が活動しているのである」(Die feudalen Instinkte betätigen sich ... wie zur Zeit, wo der normännische Erober ... 36 Dorfschaften zerstörte, um den New Forest zu schaffen ...)

それに対して、「エコノミスト」の論説自体においては、「封建制と鹿猟林」という表題の通り、「封建制」への言及が、質量ともに大事な重味をもっているのである。

(3) 紹介資料の内容の概略

——ノルマン封建制の導入

「エコノミスト」1866年6月2日号掲載の論説「農業；封建制と鹿猟林」は、ハラム (Hallam)、ヒューム (Hume)、ティエリー (Thierry) という三名の史家の叙述を借りる形で、ノルマン征服によってイギリスに導入された封建的土地保有について、そしてそれとの関連で鹿猟林の慣行の形成について、語っている。

ハラム Henry Hallam, 1777-1859年。

英国の歴史家。オクスフォード大学を卒業し、弁護士を開業したが、父の死後財産を相続し、歴史研究に専念する。主著「中世紀ヨーロッパ状態概説」*View of the State of Europe during the Middle Ages*, 1818。

「ヘンリー7世即位からジョージ2世崩御に至るイングランド憲政史」*Constitutional History of England, from Henry VII's accession to the death of George II* (1485-1760), 1827。

ヒューム David Hume 1711-76年。

哲学者として余りにも有名。「イングランドの歴史」*The History of England*, 1754-61.の著者でもある。

ティエリー Jacques Nicolas Augustin Thierry, 1795-1856年。フランスの歴史家。主著「ノルマンによるイングランド征服史」*Histoire de la conquête de l'Angleterre par les Normands*, 1825。「エコノミスト」誌が M. Thierry としている点は、符合しないが、その点は不明のまま、今はこう推定する外ない。

ハラムからの引用は、次の通りである。「ウィリアム王の容赦のない残酷さを物語るものとして、二つの事例がよく知られている。ヨークシャの蹂躪とニューフォレストのそれである。前者にあつては、…タイン川からハンバー川に至る全州が荒らされ、以後9年間にわたって人々の住みついた村落は一つもなく、人影はほとんど無くなったのである……。ニューフォレストの事例は、前者よりは明らかに悲惨さの程度は少ないとはいふものの、その行為の愚かさ、大義の無さという点では、前者よりもはるかに奇怪である。ウィリアム王は、他にもいくつかの地域を選んで狩猟林にしたのである。そして、これらのノルマン諸王の愛好の直営地は、御料林法と呼ばれる邪悪で残酷な規制の体系によって保護されたのだった。この体系こそは、後世において、自由の唱道者たちによって、修正すべき一大対象と目されたのである。」

ヒュームからの引用は、三ヶ所ほどある。第一は、

上記の狩猟林を巡る非道に関してである。「前代までの諸王がイングランドの各地にもっていた狩猟林では満足できずに、ウィリアムは、通常の居住地・ウィンチェスターの近くに新しい狩猟林を造ることに決めた。その目的でハムプシャで30マイルの区域を転用し、人家からは人を追い出し、その財産を没収した。被害者たちに対しては、何らの損害補償もなされなかった。」

「エコノミスト」記者は、ヒュームのこの叙述に続けて、当時の不動産法規の特質を巡る自己の見解を述べている。「現代の地主が封建制およびその派生物としての狩猟法（『あの御料林法の非摘出の庶子』）という残酷な制度から引き継いでいる土地財産に関する封建的概念は、疑いもなく悪質な存在である。それこそは自由の唱道者、健全な経済法則の唱道者たちが、是正に努めなければならないものである。現代の制度のなかのこのような悪質な部分の修正を援助するためには、次のことが不可欠ではないとしても有益である。すなわちその発生の原因を淵源までさかのぼって探究すること、それによってイギリスにおける鹿猟林と狩猟保護区の形成および土地財産の公正を欠く管理という略奪行為が、支配と征服との愛好心から生まれたものであり、さらにその愛好心は、野卑な娯楽趣味への熱情とないまぜになっており、その熱情は封建制とともにイギリスの財産規制法へと導き入れられたものである事情等が明らかにされることである。」

ヒュームからの引用の第二は、ウィリアム王による封建制の導入についてである。ノルマンのウィリアムは、「フランスとノルマンディで定着していた封建法を、イングランドへ導入した。……彼は、国王直営地以外のイングランドの土地について、ごくわずかを例外として、全て貴族領土に分割して、これらを彼に従ってきた荒らくれ者のなかの重要人物たちに、一定の奉公と貢納とを条件にして、授与したのである。これらの大貴族たちは、国王から直接に授けられて領地を保有するのであるが、その土地の大部分をさらに騎士あるいは封臣に指名された外国人に分ち与えたのである。この騎士あるいは封臣は、大貴族たちが国王に対して負ったのと同様の義務と服属とを大貴族に対してなしたのである。……生粋のイギリス人は誰も第一級の地位には認められなかったので、土地財産の保持者の極めて少数の者が第二級の地位に迎えられて喜んだにすぎなかった。彼らは、強力なノルマン人の被護の下に、祖先から自由に相続していた領地の上で、耐えがたく重い負担と引きかえに、自らを、そして子孫を領主の地位につけたのである。」

「エコノミスト」記者は、ヒュームからのこの引用部分に基づいて、次のような見解を展開する。「結局のところ、この封建的土地保有制度が、イングランドと同じように、スコットランドにも堅固に根づいた。そして、スコットランド土地法は少なくともイングランドのそれと同じように強く暴政と圧制の痕跡を帯びているのである。現在の不動産法規とその法規から生まれた習慣慣行を考慮するさいには、イギリス土地法規の封建的起源が十分に究明され絶えず想起されるのではないと、全く理解しえないことが沢山存在するのである。」

ヒュームからの引用の第三は、ノルマン征服の特質（それ以前の征服と比較して）に関してである。ウィリアム王は「彼の制定した諸法規の組立において、ノルマン人とイギリス人との間に区別を明確にすることに腐心した。彼は、ノルマン人に有利になるように、すべてにおいてイギリス人に対して絶対君主として振る舞った。イギリス人の利益や感情は、彼によって、全く無視されたのだった。……歴史書と日常語との双方で征服と命名されるほどの大変革のなかで、ノルマン征服ほど暴力的で、権力と財産との急変を惹起したものは、他にほとんどないのである。その支配をヨーロッパ各地に広げたローマ人の国家のばあい、個人の諸権利にはほとんど変更を加えず放置した。文明をもった征服者たちは、帝国の本拠は自国内に置いておき、被征服民には彼らの土地と私有財産の自由な行使を保証してやるのが最大の利益につながることを知っていた。ローマ帝国を征服した蛮族たちは、……彼らの必要を満たすには土地の一部だけあれば足りることを知っていて、耕作の仕方や収穫の仕方をよく習得しているわけでもない土地財産を広く押収しようなどとはしなかった。しかし、ノルマン人とウィリアム王の旗印に従う外国人たちは、違っていた。彼らは、征服された王国に統治の本拠を置いた。技術的に進歩していて、大土地所有の利益に通曉していた。そこで、旧来の土着民を徹底的に制圧して、征服者の被征服者に対する権限を極限に至るまで押し進めた。（征服者の権限は、欲心と野望の眼からみると非常に広大なものであった。理性の眼からみると狭いものであるのだけれども）。」

「エコノミスト」記者は、このヒュームの叙述を現状と関連づけて、次のように結論する。「こうしてノルマン人が土地の所有者になり、イギリス人が土地の耕作者になった。（当時にあつては富の主要源泉は土地であつたが）その土地に関連する法規についてみると、

それを組立て運営する精神が、征服者の被征服者に対する感情によって濃厚に彩色されることになったのである。おそらくは、われわれの社会状態の多くの特色が、このノルマン征服の事情に帰着するはずである。」

ティエリーからの引用は、上にみたハラムやヒュームのばあいと違って、まとまった文章ではない。「エコノミスト」記者が、自己の見解を述べるにあたつて、適宜取捨選択したティエリーの章句を折り込んでいるという形である。実例を示すと、次のようになる。（『 』内がティエリーからの引用。「 』内のそれ以外の部分が「エコノミスト」記者の文章。）

「M・ティエリーは、そのノルマン征服史の序文で言う。『現在において、相互に不信の眼差しを交し合い、思想のあり方、統治の仕組みを巡って実際に相争っている上層階級と下層階級は、古い時代の征服民と被征服民の系譜的な後継者なのである。……侵略者の種族は、他国の国民から転じて、特権階級となって残留した。』そうして、彼は、次のような事柄に着目した。すなわち、『下層階級の出身者』であっても、時に応じて引き上げられて、特権階級の地位に就任できる。そういう形で、統治の封建的組織つまり土地保有階級に組み込まれていったのである。』

「当面の目的のためには、進歩改良の自然の歩みを妨害するものの全てあるいは殆どが、この国の土地所有に関する限りは、ノルマン征服の時に導入された封建制度に源を発しているということだけで、十分である。われわれが、従来商業の発展および個人の権利（それは自由の名で呼ばれる）の優位の強化によって、土地を巡る封建的見解の多くを除去してきたこと、そして一般に、土地を貸し出す権利の基礎づけをその真実の起源、『改良者の道徳的資格』に求めるようになったことは、確かに本当である。だが、実際の不動産法規は、きわめて多くの封建的なものを維持しており、土地所有者がしばしば『土地所有の権利』を濫用して、実務の経験もあり学識もある人々の意見と全く相反する結果を惹き起しているのである。」

(4) 紹介資料の内容の意義

——封建制への非難と評価

「エコノミスト」記者の論調は、土地所有者の横暴と封建制の悪とを強調するところに特色がある。それらは、先述部分にあるように「自由の唱道者、健全な経済法則の唱道者たちが、是正に努めなければならないものである」と、理解されている。論説の最終部分

では、土地所有者の排除を意味することになる借地農業者への全収穫の帰属をさえ主張するに至っている。

「農場で育てられたもの、あるいは農場で生れ出てきたものはすべて、借地農業者が所有すべきである。穀物であれ、牧草であれ、家畜であれ、野生の動物であれ、問うところでない。借地農業者の権利に対する干渉は、地主によるもの、執事によるもの、猟場番人によるもの、いずれを問わず、大いに不得策であり、公正を欠くのである。」

この記者の見地からすると、封建制は土地所有制度のなかに生存を続けているものであり、一般的には「自由」の名で呼ばれる個人の権利を侵すもの、特殊的には産業資本家の「自由」活動の軌跡として現われる経済法則の健全さを歪めるものであった。

「封建制から資本主義への移行」を原始的蓄積論として検討していたマルクスは、「原始的蓄積の歴史のなかで歴史的に画期的なものと言えば、形成されつつある資本家階級のために横杆として役立つ変革はすべてそうなのであるが、なかでも画期的なのは、人間の大群が突如暴力的にその生活維持手段から引き離されて無保護のプロレタリアとして労働市場に投げ出される瞬間である。農村の生産者すなわち農民からの土地収奪は、この全過程の基礎をなしている」と言う。(K1. S. 744; ③361-2頁)

このマルクスの見地からすると、農民からの土地収奪、土地からの農民追放は、「封建的所有や氏族的所有の近代的私有への転化」として把握されるのであり、「エコノミスト」記者の封建制理解とは正面から相反することになるものだった。その点に、マルクスが、「エコノミスト」誌からの引用にさいして、土地収奪・土地からの追放としての「鹿猟林」の部分だけを採用し、「封建制」の部分には殆ど触れなかった理由を見出すことができよう。

「エコノミスト」誌への引用部分で見る限りではハラム、ヒューム、ティエリーの三名の史家もまた、ノルマン封建制に対して、否定的側面を強調する理解を抱いていたように考えられる。

ハラムの場合、「ノルマン諸王の愛好の直営地は、御料林法と呼ばれる邪悪で残酷な規制の体系によって保護されたのだった。この体系こそは、後世において自由の唱道者たちによって、修正すべき一大対象とされたのである」という言葉に窺えるように、ノルマン諸王の所業は、「自由」への敵対物として把握されている。

ヒュームの場合、ノルマン以前の征服者たちは「被征服者には彼らの土地と私有財産の自由な行使を保証してやるのが最大の利益につながることを知っていた」のに対して、ノルマン諸王は「旧来の土着民を徹底的に制圧して、征服者の被征服者に対する権限を極限に至るまで押し進めた」という一節から知られるように、土着のイギリス人からの自由の奪取という所に強調点が置かれている。

ティエリーの場合、ノルマン征服の時に導入された封建制と結びついている「土地所有の権利」は、「自由」と同義とされる個人の権利やそれと類縁関係にある「改良者の道徳的資格」と根本的に対立するものとして、位置付けられている。

このように、ハラム、ヒューム、ティエリーの三名の史家は、ノルマン征服、それによる封建制の導入を自由の抑圧、自由の剝奪として、非難すべきものとする点で、論調を揃えているように見える。

それに対して、20世紀の歴史家の場合には、どうであろうか。一例をジョージ・マコーリー・トレヴェリアン G. M. Trevelyan 1876-1962 にとてみたい。彼は、「イングランド史」*History of England*, 1926年、第2編「国民の形成、ノルマン征服から宗教改革まで」(The Making of the Nation, From the Conquest to the Reformation)において、ノルマン征服による封建制の導入について、次のような判断を記している。

「封建制は、中世の特徴的な制度である。それは、野蛮な無政府状態に代えて文明的な秩序を達成するために、社会の一定の階級の他の一定の階級への従属を固定し法制化したことを意味する。封建社会は、貴族と騎士、司教と修道院長の間に、農村の農奴の労働の剰余生産物を配分した。土地から得られる所得の不均衡等を定形化し規則化することによって、貴族と高位聖職者の掌中に富を集積できるようにし、富者の贅沢品に対する需要を促進し、かくして商業都市の貿易や一層高度の工業と技術を発達させたのだった。しかし、たしかにそれは自由と平等の道に沿うものではなかった。」(New Illustrated Edition, 1973. P.159. 邦訳「イギリス史・1」1973年、みすず書房刊、130頁、ただし訳文は変更した箇所がある。)

「自由と平等の道」に反していると一方的に非難されているわけではない。「文明的な秩序を達成する」ものとして積極的に評価されている。この間の歴史認識の深まりを見ることができよう。(1994. 11. 18)

AGRICULTURE

FEUDALISM AND DEER FORESTS

Amongst the items of news in a Scotch newspapers of last week we read the following announcement, which on many accounts is at once melancholy and discreditable : - "One of the finest sheep farms in Sutherlandshire, for which a rent of 1,200*l* a year was recently offered, on the expiry of the existing lease this year, is to be converted into a deer forest." We last week referred to a lecture at the London Farmer' Club on increasing the supply of animal food in this country, in which the lecture pointed to additional outlays of capital upon, and the general improvement of land-both cultivated and waste land-as the means of increasing that supply. Yet here we see the modern instincts of feudalism-so fatally engrafted on our laws and notions of property in land-operating pretty much as they did when the Norman Conqueror (who introduced the feudal system of tenures) destroyed 36 villages to create the New Forest. Hallam's description of the old feudal operation of "afforestation" may not inaptly be cited as a companion picture to the above account of the creation of a modern deer forest. The historian says : - "Two instances of William's unsparing cruelty are well known, the devastation of Yorkshire and of the New Forest. In the former.....the whole country between the Tyne and the Humber was laid so desolate, that for nine years afterwards there was not an inhabited village, and hardly any inhabitant left..... That of the New Forest, though undoubtedly less calamitous in its effects, seems even more monstrous from the frivolousness of the cause. He *afforested* several other tracts. And these favourite demesnes of the Norman kings were protected by a system of iniquitous and cruel regulations called the forest laws, which is become afterwards a great object with the assertors of liberty to correct." And Hume, referring to the same evil deed, says : -"Not content with those large forests which former kings possessed in all parts of England, he resolved to make a new forest near Winchester, the usual place of his residence, and for that purpose he laid waste the country in Hampshire for an extent of thirty miles, expelled the inhabitants from their houses, seized their property, and made the sufferers no compensation for the injury." The feudal notion of landed property which modern landowners have derived from that atrocious system-feudalism, with their consequence the game laws-that "bastard

slip of the forest laws"—are assuredly evils which the assertors of freedom and of sound economical laws must strive to correct. And to aid in the correction of such maladies in our system it will be useful if not necessary to trace them to their source and so doing we shall find that these acts of spoliation—these creations of deer forests and game preserves—and most of the mismanagements of landed property in England, spring from that love of domination and conquest, accompanied as it was by a passion for barbarous pastimes, which was introduced with feudalism into the laws regulating English property.

Hume tells us that William the Norman, having for the most part despoiled the English gentry of their estates and bestowed them upon his own rapacious followers and foreign adventurers, for the purpose of effectually subduing the kingdom, "introduced into England the feudal law, which he found established in France and Normandy.....He divided all the lands of England with very few exceptions besides the royal demesnes into baronies ; and he conferred these, with the reservation of stated services and payments, on the most considerable of his adventurers. These great barons, who held immediately of the Crown, shared out a great part of their lands to other foreigners who were denominated knights or vassals, and who

paid their lord the same duty and submission which he owed to his Sovereign.....As none of the native English were admitted into the first rank, the few who retained their landed property were glad to be received into the second, and under the protection of some powerful Norman, *to load themselves and their posterity with this grievous burden, for estates which they had received free from their ancestors.*" This feudal system of holding land eventually became as firmly established in Scotland as in England, and the Scotch land laws have retained at least as strongly as those of England the taint of tyranny and oppression thus imparted.

In considering our existing real property laws, and the customs and habits which have sprung from those laws, there is much which will always be wholly unintelligible unless the feudal origin of the land laws of Britain are carefully studied and constantly borne in mind. And the different and more depressing influence of the Norman conquest, with the introduction of the feudal system, upon the fortunes and prosperity of the people of Britain, as compared with the prior conquest by

the Romans, will be obvious from another passage from Hume. The historian says that William “in the very frame of his laws made a distinction between the Normans and English, to the advantage of the former, that he acted in everything as absolute master over the natives, whose interests and affections he totally disregarded..... Scarce any of those revolutions, which both in history and in common language have always been denominated conquests, appear equally violent, or were attended with so sudden an alteration both of power and property. The Roman State, which spread its dominion over Europe, *left the rights of individuals in a great measure untouched* ; and those civilised conquerors, while they made their own country the seat of empire, found they could draw most advantage from the subjected provinces by securing to the natives the free enjoyment of their own land and of their own private possessions. The barbarians who subdued the Roman Empire.....found a part only of the land sufficient to supply all their wants, and they were not tempted to seize extensive possessions, which they knew neither how to cultivate or enjoy. But the Normans and other foreigners who followed the standard of William, while they made the vanquished kingdom the seat of Government, were yet so far advanced in arts as to be acquainted with the advantages of a large property ; and having totally subdued the natives, they pushed the rights of conquest (very extensive in the eyes of avarice and ambition, however narrow in those of reason) to the utmost extremity against them.” The owners of land thus became the Normans, while the cultivators were the English, and the spirit in which the laws relating to land (the chief source of wealth in those days) were framed and administered, partook largely of the sentiments of the conqueror towards the conquered. Probably, much of our social condition is to be attributed to the same source of conquest, such at all events, M. Thierry, who in the introduction to his history of the Norman conquest, says “the higher and lower classes who, at the present day, keep so distrustful an eye upon one another, or actually struggle for systems of ideas and of government, are the lineal representatives of the peoples conquering and the people conquered of an anterior epoch.....The race of the invader, when it ceased to be a separate nation, remained a privileged class.” And he notices the fact that those who were from time to time recruited into the ranks of the privileged class, though drawn from “the inferior ranks,” become affiliated to the feudal organisation of the governing, the landholding class.

For the present purpose however, it is sufficient, that all or most of the peculiarities which interfere with the natural course of improvement, so far as regards landed property in this country,

is to be traced to the feudal system introduced at the time of the Conquest. That we have so far got rid-by the growth of commerce and the increased ascendancy of individual right (which may be termed liberty)-of many of our feudal notions respecting land, as generally to rest the right to land on its true origin "the moral claim of the improver," is true. But the actual law of real property retains so much of feudality, that the owners occasionally use "the right of landed property" in such a way, -in a manner so utterly inconsistent with both the practical and educated opinions of the day, -that they put a strain upon their institution, in its present form, which it will scarcely bear "without snapping."

We noticed recently that in the then pending election for Aberdeenshire, the objections to game and game preserving were urged strongly in favour of one and in opposition to the other candidate. That election has since resulted in the election of the anti-game-law candidate by a very large majority. This fact is significant. Again, Mr. A. Robertson lately read a paper at the Guildhall, Perth, on "Game Laws and Deer Forest," which undoubtedly contained some warnings against such an abuse of property, as the "afforesting" the sheep farm in Sutherlandshire involves. He ranged his remarks on these abuses under two heads. (1) Their cruel effects on the peasant population : and (2) Their detrimental effect on agriculture. He maintained that every member of society is interested in getting rid of game preserves of all kinds. "Whether farmers knew or not as to the game nuisance before signing their leases, the public had a right to demand that the fair produce of the soil should not be wantonly

destroyed. Society had no business to inquire what stipulations regarding rent may have been made between tenant and proprietor, but it was fair and right that it should see that no injustice was done to one or other, so far as legislation was concerned."

In reference to the Scotch Highlands, he said. "The legalised protection to wild animals in the Highlands was most severely felt in reference to the peculiar products of that country. Two millions of acres had been laid totally waste, embracing within their area some of the most fertile lands of Scotland. The natural grass of Glen Tilt were among the most nutritive in the county of Perth. The deer forest of Ben Aulder was by far the best grazing ground in the wide district of Badenoch ; a part of the Black

Mount forest was the best pasture for blackfaced sheep in Scotland. Some idea may be formed of the ground laid waste for purely sporting purpose in Scotland from the fact that it embraced an area larger than the whole county of Perth. The resources of the forest of Ben Alder might give some idea of the loss sustained by the country from these forced desolations. The ground would pasture 15,000 sheep, and as it was not more than one-thirtieth part of the old forest ground in Scotland, it might be roughly guessed that the country was deprived by the forest of half-a-million of sheep. All that forest land was totally unproductive, never having repaid the money spent on it. *It might thus as well have been submerged under the waters of the German Ocean.* With a rapidly augmenting population, it was nothing short of madness to continue adding to these desolations, and thereby diminishing the supply of those commodities which are indispensable for the sustenance of the people. If Vattel, Adam Smith, and John Stuart Mill were to be believed, such extemporised wildernesses or deserts ought to be put down by the decided interference of the Legislature. The vulgar notion of grouse shooting and deer slaughtering being advantageous to the Highlands was now almost exploded. People had begun to see that the visit of a few sportsmen for a month in the year could not make up for eleven months forced idleness."

These are facts worthy of more than a passing consideration, now that our supply of animal food is matter of just and anxious discussion. Then he said that the key to all legislation—it should be the reversal of all legislation—on the subject, is that "Wild animals never have been, and never can be made, private property," and added :—"Science rejected all the various remedies proposed for these acknowledged abuses. It condemned the various schemes proposed by farmers generally, and the visionary expedients of agricultural societies. It laboured under the advantage or disadvantage of rejecting friendly compromise. It mocked at all opinions, even from the most trustworthy sources. It was certain knowledge, or no knowledge at all. The position to be taken was necessarily either true or false, exactly in the same manner as the solution of a mathematical problem was either true or false. To get a right beginning on such an important question as that of the game laws would indeed be a great matter, as such questions were generally begun at the end instead of the beginning. As the great principles of justice and equity seemed so clear in reference to the subject, the question resolved itself into this - Where they to be guided by truth and rectitude, or by injustice, and consequently crime, tyranny, and oppression?" Such higher and more general views are

quite in accord with practical experience. Nothing can be more nonsensical than the opinions occasionally expressed, that "over-preservation of game" and the like are the evils of the farmers ; that they do not object to their landlords preserving a "fair amount of game," and so forth. While effect is sometimes attempted to be given to such notions by elaborate stipulations and arrangements, as to "winged game and ground game," rabbit killers employed by the landlords, and palliatives of that sort. Nothing of the kind is of the least use. The occupier of a farm ought to have all that is grown or comes upon it, be it grain or grass, live stock or wild animals ; and any interference with his rights as occupier, whether by landlord, steward, or gamekeeper, is grossly impolitic and unjust.

付記。

1. 以上, "Economist" June 2, 1866より。第一区分はその645頁右欄途中より。第二区分は646頁左欄全部。第三区分は646頁右欄途中まで。
2. 東京大学経済学部所蔵のマイクロフィルムから複写した。複写作業に長男・英資の, 不鮮明な複写からのワープロ入力に長女・里子の助力を得た。1992年頃のことである。